

第15回日本胸部外科学会総会の思い出

第15回 会長 鈴木千賀志

第15回日本胸部外科学会総会は、昭和37年10月30日、31日仙台市川内（かわうち）の東北大学記念講堂、川内講堂および松下会館の3会場で開催された。

当時、日本胸部外科学会会員で日本胸部疾患学会にも入会されている方が可成り多かったので、両学会総会を同じ場所で相前後して開催することが慣例になっていたが、日本胸部疾患学会々長中村隆教授は、10月末頃まで海外出張の予定になっていたので胸部外科学会総会もその頃に開催せざるを得なかったが、10月末の仙台の天候を仙台管区气象台に占っていただいたところ、ここ数年間の統計によると、仙台地区は10月30、31日が好天気の高確率というご託宣であったので、会期をこの両日に決定して準備を進めた。

武藤完雄先生は、よく「世の中に信用できないものが3つある。新聞記事と統計と女の涙」と言われていたが、正にその通りで仙台管区气象台のご託宣は見事に外れて2日間とも雨に祟られて遠方から来られた会員諸氏にはほんとうに申し訳なかった。

学会の準備のほうは、元会長の武藤・桂両先生が後楯として控えておられ、抗研外科医局員のみならず、武藤外科・桂外科両医局の諸君も応援して下さったので、極めて順調に進み、また学会当日は、東北大学記念講堂は抗研、川内講堂は武藤外科、松下会館は桂外科というふうに分担して運営していただいたので、極めて円滑かつ効率的に運営された。

会員数は、3,869名であったが、他の学会、とくに日本結核病学会や癌学会等と較べて年齢層が極めて若いことが注目された。

採用した一般演題数は、133題で、その内訳は、肺・気管支および胸壁の外科に関するものが85題、心臓・大血管外科に関するものが31題、食道外科に関するものが6題、乳腺、胸壁、胸腺等に関するものが各1題あり、これらの演題が3会場に分れて発表され、質疑応答も活発におこなわれた。

申込まれた一般演題のうちに、「肺結核手術後の合併症と対策」、および「重症肺結核の外科療法をめぐる諸問題に関する演題が11題づつあったので、纏めて2つの円卓討議形式で発表していただいたが、200名程度しか収容できない松下会館は超満員の盛況で、speaker と floor の聴衆が一体となって自由に討議することが出来、予想外の成果を挙げることができた。

この他に、シンポジウムが3題あり、その1つ、「肺外科の現状と問題点」は、ト部美代志教授の司会で4名の演者と3名の特別発言者により肺化膿症、肺結核および肺癌の外科についてわが国の現状と現在残されている問題点について報告された。

第2番目の「食道外科の現状と問題点」は、桂重次教授の司会でおこなわれ、まず司会者が食道外科の全国的統計と現況について概説されたのち、11名の演者によって食道癌手術適応の決定、手術方法および食道欠損部に完全に遊離した腸管を細小血管を吻合移植して食道を再建する新しい術式が発表された。最後に、司会者と特別発言者中山恒明教授との間で、中山教授が胸壁前食道胃吻合術を三期的に実施している理由や、中山外科教室の手術死亡率が他施設に較べて格段に低い理由等について一問一答があり、答弁が聊かすれ違い気味であったが、満場を沸かした。最近わが国の

食道外科も全国的に平均して普及し、しかも全国的にレベルが向上したという印象を受け、心強く感じられた。

シンポジウム(3)「心臓外科の現状と問題点」は、榊原任教授の司会で、14名の演者によって主として弁口手術および中隔欠損手術に関して報告がおこなわれたが、演者の顔触れが新鮮なうえに、これらの手術を実際に手掛けておられる方々がどのような点で最も苦勞しているかを映画をもって示されたので、聴衆にとっては、非常に効果的であった。

またパネルディスカッションとして、「胸部外傷」と「心臓外科における人工弁の応用」を取上げたが、前者は、以前から話題に上りながら立消えになっていたものであるが、期待された胸部外傷の発生機序や病態生理に関しては、動物実験では実施が困難ないし不可能な精もあって胸部圧傷や血胸に関する実験的研究について報告があっただけで、臨床面では治療に関する症例報告的なものが多く、纏った総括的な報告は聴かれなかった。

「心臓外科における人工弁の応用」をパネルディスカッションとして取上げたことは、わが国では未だ時期尚早いかとも考えたが、木本誠二教授の司会で新進気説の8名の演者により人工大動脈弁および僧帽弁、移植に関する実験的ならびに臨床的研究成績が発表され、なかんずく広島市民病院の田口一美博士は、自家考案の種々な型の人工弁大動脈弁23例(うち14例は完全移植)、僧帽弁16例、計39例に移植し、死亡率が28.7%で、最新な hoisted woven teflon tricuspid valve 移植例では手術死亡はなく、機能的にも良好であり、2弁移植も可能であることを報告し、会員に多大な感銘を与えた。

特別講演として、Dr. Earle B. Kay (St. Vincent charity Hospital, Cleveland) による“Aortic valvular surgery with artificial valves”がおこなわれた。Dr. Kay は、周知のように Kay-Cross 型人工心肺の考案者であり、1956年この装置を用いて肺動脈弁狭窄の直視下手術に成功し、その後主として僧帽弁疾患の直視下手術の研究に従事し、手術例数は既に数百例に達したという。1960年5月初めて人工弁を用いて大動脈弁の完全置換手術に成功し、これまでに130例の手術例数を積んだという。第二次世界大戦中は軍医中佐としてテネシー陸軍病院の胸部外科部長として軍務に服されたという。そんな関係から1962年秋、米国とキューバとの関係が極度に悪化し、一触即発の危機を迎えたので、Dr. Kay は軍からの足止めに遭い、来日が危まれたが、学会の直前に急天直下解決したので、来日講演の運びとなった。

同博士の講演の中の大動脈弁の置換手術に用いた人工弁は、同行された共同研究者鈴木章夫博士の手によって開発されたもので、何年間かかって動物実験によりその安全性と性能が確認されたうえ、臨床例に用いられたということである。日本人は、こうした方面でも縁の下力持ち的な仕事をしていることが窺われた。

アメリカでは、人工弁、手術がここ1～2年に急速に拡がり、一般的 routine な手術になりつつあるというが、聊か驚異的であった。しかし Dr. Kay らが現在挙げている好成績が如何程持続するかは未知数であり、これから5年後、10年後にどうなるかを是非知りたいものである。

最後に、会長演説として「心肺予備能力の評価を旨としたわれわれの肺機能検査法の研究回顧」と題して外科的見地に立脚した心肺機能予備力の評価法の研究について述べ、特に肺切除術の安全限界として体表面積当りの全肺血管抵抗値を500dyne, sec, cm⁻⁵ とすることが妥当であると報告した。

最後に、論語の子罕篇の一節「後生畏る可し。焉んぞ来者の今に如かざるを知らんや」を引用して、今後わが国の胸部外科学界を背負って立たなければならない20歳代、30歳代の若い会員諸君の

奮起を促がし、外国人が既にやった研究の追試などはやめて、自己の新しい idea を活かして—それがどんなに小さいものでも大切にして根気よく育成して発展させるようにしていただきたいと結んで閉会した。

また、学会の行事には直接関係ないが、前回会長の榊原教授が「研究者の妻として夫を扶け、余生苦勞を分かちあっておられる日本胸部外科学会々員の令夫人方を、せめて年に1回だけでも学会に同伴し、煩わしい家事から解放してあげ、各地の風物に接したり、ご主人がなされている研究の一端なりをご理解していただくようにしたい」という趣旨で「夫人の会」が創設されたが、本年もこれを継承して会期中に東北大学の附属研究所の見学と松島、平泉の中尊寺の観光旅行を計画したところ、28名のご夫人方のご参加を得て、互に未知の方々がお知合いになり、懇親を深める上に大いに役立った。

また学会が終了して、11月6日、南江堂の「胸部外科」の編集同人の篠井、榊原、赤倉、石川、藤田、沢崎、林の諸員が小生の慰勞会と称して箱根芦の湯の松坂屋ホテルにご招待下され、第15回日本胸部外科学会総会を回顧しながら、夜が更けるまで大いに語り合ったが、あれからもう15年以上も経ったのにツイ昨日のことのよう鮮かに思い出されて懐しい。 (東北大学名誉教授)